

NPO 法人 ベーシックライフインフォメーション協会 会報第16号

第3回オール台湾デー盛況の下に終わる

平成30年度のオール台湾デーは好天に恵まれ10月7日練馬ココネリホールで開催、延べ400人の来場者があり終日にぎわった。

午前10時 映画「空を拓く〜建築家・郭茂林という男〜」上映

12時 バザーオープン

13時30分 講演「超高層ビル出現の歴史と意味を考える」

講師 高崎経済大学 准教授 大澤 昭彦氏

15時 映画「はるかなるオンライン山」

第3回ALL台湾DAYに参加して

会員 児玉 治

NPO法人ベーシックライフインフォメーション協会主催の第3回ALL台湾DAY

が10月7日(日)、練馬駅徒歩2分のココネリの3階ホールで開催されました。プログラムは午前中にドキュメンタリー映画「空を拓く〜建築家・郭茂林という男〜」の上映、午後の部で「超高層ビルの誕生とその歴史的意義」と題する霞が関ビル完工50周年記念講演会。講演終了後、日本・台湾交流映画上映会として「はるかなるオンライン山」が上映されました。

た。「空を拓く〜建築家・郭茂林という男〜」は

ALL台湾DAYでは毎回上映されるお馴染みの映画であり、ベーシックライフインフォメーション協会が特に力をいれています。この理由として八田與一が戦前台湾に渡り、灌漑事業に成功し多くの台湾人から今もって感謝されているが、逆に台湾人で日本に渡り、日本に大いに貢献した人物、郭茂林の名は殆ど知られていないの現状であり、彼の業績を



ALL台湾DAYポスター



台北駐日経済文化代表処 謝長廷氏から



バザーのウーロン茶作法教授

日本人に周知徹底したい強い思いがあるからです。この映画のポイントには日本では地震等を考慮して建築物に高さ制限があったがこの高さ制限が撤廃後、日本で初めて超高層建築物の霞が関ビルの完成に郭茂林が大いに貢献したことを紹介するものです。

この映画を初めて鑑賞された方は異口同音に「こんな素晴らしい台湾の方がおられたことを初めて知った」との感想を抱かれました。今年には台湾の公共放送「公視(PTS)」の3チャンネルで放映され、台湾でも大きな反響がありました。

午後の部で「超高層ビルの誕生とその歴史的意義」と題する霞が関ビル完工50周年記念講演会が高崎経済大学地域政策学部准教授大澤昭彦博士をお迎えして開催されました。同氏により世界の超高層建築物の歴史的経緯、さらに超高層ビルの今後についてとても分かり易いスライドを駆使して素人にも分かりやすい講演をしていただきました。日本においては地震等の関係から建築物の100尺・31メートルの高さ制限があり高層建築の妨げになっていましたが、1963年に高さ制限が撤廃され、その結果、高さ156メートルの霞が関ビルが1968年に完成しました。霞が関ビルのような超高層建築物の工事には多くの方々の関与なくしては成り立たず、郭茂林が建築委員会委員としてデベロッパー、建築会社、設計事務所等をつなぐコーディネーターとして活躍され、同氏無くして完成はなかったと今もって言われており、世界的建築家安藤忠雄氏も郭茂林の構想力を高く評価しています。

講演終了後、「はるかなるオンライン山」が上映され、オンラインとは台湾語でパイナップルのことです。沖縄の特産物として名高いパイナップルのルーツは、戦前にパイン工場を沖縄・石垣島に根付かせようと渡って来た台湾人からの入植者によってもたらされました。当初、台湾人と沖縄の方との間でトラブルが生じ困難な状況を経験しながらも、大きな夢を実現させていくドキュメンタリー映画です。

映画を鑑賞されたご婦人の一人が毎年石垣島の美味しいパイナップルを贈答用に利用しているそうです、がこの映画を見て初めて石垣島のパイナップルのルーツがわかったと大変喜んでおられました。

全てのプログラム終了後、台湾出身の建築家林永全先生を紹介していただきました。同氏は戦前、東京帝国大学工学部建築学科の大学院に私費留学され、工学博士取得後、日本の建築界の第一線で活躍され郭茂林とも一緒に仕事をされた経歴をお持ちです。奥様も台湾出身で林先生と同じ東大研究室のクラスメイトでお体にハンディがあり、同大学大学院終了後、日本で初めてバリアフリーの設計に携わり、同氏の設計した建築物には多くの見物者があったことなど貴重なお話を伺うチャンスも与えられ、プログラム以外にも多くの収穫が得られ私にとって有意義な一日でした。

台湾人戦没者慰霊碑へ ハイキングと慰霊



台湾人戦没者慰霊碑慰霊は東京都奥多摩町川野の山中にあります。紅葉の盛りの林を抜けた笠松展望台にある台湾人戦没者慰霊前で11月3日12時慰霊を行いました。

碑の周辺は奥多摩町の手で森林の枝打ち、間伐がなされ林道に砂利が追加されて環境がよくなり一段と眺望がよくなりました。町発行の観光地図に慰霊碑が表示されました。



参加の皆さん

台湾人戦没者慰霊に参加して

会員 堀 奉博

今年の台湾人戦没者慰霊は秋の好天に恵まれた11月3日(土・祝日)に、奥多摩湖畔を見下ろす現地にて挙行された。参加者は田代理事長他11名。

河岸より別れた山道はバイク愛好者が時折駆け抜ける程度で、一般車はわがグループ以外には見られない。慎重な上にも慎重なハンドルさばきの蔡トライバーでしたが、行程三分の二あたりで敷設砂利にタイヤがとられ、人力による後押しもむなししく前進不能と判断し、携行品は手分けして慰霊碑まで持ち運びました。



慰霊碑

慰霊碑周りは季節の贈り物||落ち葉の絨毯が敷かれている様が用意された竹箒や素手による手箒で掃き清められ、緑鮮やかな苔が優しい表情でもって慰霊祭の舞台を演出してくれた。石碑には持参の花、茶菓、飲み物が祀られた。準備が整ったところで田代理事長より本慰霊祭の経緯について説明があり、各々の思いを込めて頭をたれたしだいでした。

式典の後はお昼の時間。眠られる方々の故郷・日月潭に似た地として選ばれた慰霊地の美しい景観をも添えられたおいしい食事は、楽しい語りとともに今日一日の充実した行いを満たしてくれるものであった。

湖畔に戻ったところで感激したのは、樹木に覆われた山腹の一面に慰霊地が見上げる眼に見届けられたことでした。その湖畔より、来年は今日石碑周辺に移植された紫陽花が望まれることを期待しながらバスの人となった。



慰霊碑からの眺め

台湾人戦没者慰霊に台湾人も参加しました。

会員 藍 健吉

奥多摩の奥に、台湾出身戦没者の慰霊碑があることをご存じでしょうか。台湾人の僕は今回のイベントの参加で初めて知りました。慰霊碑のすぐ隣には、空高くそびえたつ細長い縦の石があります。聞いたところによるとこの石は台湾から運んできた石とのことでした。

今回の縁をきっかけに慰霊碑の存在を知り、台湾出身戦没者への思いをこうして形に残してくれた日本の多くの方たちの思いと支援と行動に感動いたしました。建立された場所からは湖と赤い架け橋が見え、とても眺めの良いところでした。次回、また機会があればこの場所を訪れ、過去の歴史と、日本の方々台湾出身者戦没者への思いを、忘れずにいたいと思います。



山中にのびる慰霊碑と慰霊橋

講演

超高層ビル出現の歴史と意味を考える

大澤 昭彦

大澤昭彦と申します。現在、高崎経済大学地域政策学部都市計画を教えています。都市計画という観点から、都市の高さや超高層ビルに関心を持って研究を続けてきました。霞が関ビルが建てられてからちょうど50年を迎えた現在、

超高層ビルは日常的存在になっていきます。超高層ビルが当たり前ではなかった半世紀前に、郭茂林先生をはじめとする方々が超高層ビルを実現させたわけです。今日の講演は、「超高層ビルの歴史的意義」というかなり大掛かりなタイトルではありますが、超高層ビルが生まれた歴史的な背景を簡単にお話した上で、超高層ビルの歴史的意義、さらには超高層ビルがもたらした問題についても触れます。そして最後に、人口の減少社会を迎えた日本において、超高層ビルはどうあるべきなのかをお話しします。今回の講演が、これからの超高層ビルを考えるきっかけになればと思っています。

まず、世界の超高層ビルの状況ですが、高さ150メートル以上の建物は（これは霞が関ビルより大きいビルを意味します）、2017年末までに4242棟存在します。150メー

講師 紹介

大澤 昭彦

(おおさわ ありひこ)



1974年茨城県生まれ。東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。博士（工学）。財団法人土地総合研究所研究員、東京工業大学大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻助教を経て、現在、高崎経済大学地域政策学部地域政策学科 准教授。博士（工学）。専門は、景観・都市計画・建築・

都市計画法制史。2009年、日本都市計画学会論文奨励賞受賞。著書に「高さ制限とまきしゅく」、「高層建築物の世界史」がある。

トル以上のビルは2000年前後から急激に増えています。全体の75・8%、約4分の3が2000年以降に建設されています。この20年は、世界的な超高層ビルブームと言えます。1990年代初めまでは、アメリカが超高層ビルの中心地でしたが、90年代半ばからは、アジアそれも中国が大半を占めるようになりました。

続いて、超高層ビル誕生の背景をお話しします。現在の超高層ビルの源流はどこにあるのか、どうやって実現したのかといった点を簡単に説明します。

現在の超高層ビルの原型は、19世紀末にシカゴで生まれ、ニューヨークで発展を遂げました。いわゆる摩天楼です。摩天楼誕生の背景には大きく分けて2つあります。一つは産業革命以後、超高層ビルをつくる技術が進歩したこと。もう一つは資本主義経済の確立です。技術が進歩してもそれを欲しがる人、作りたい人がいないと実現しませんので、それを担保する資本主義経済の確立が欠かせませんでした。

もちろん、巨大建築物は摩天楼誕生以前も存在していました。日本では五重塔や天守閣、外国では教会、モスク、ピラミッドなどがあります。ただ、それらはシンボリックな建物であり、実用性はありませんでした。一方、摩天楼はオフィス、ホテル、住居など、実用性のある建物でした。これが、近代以前の巨大建築物との大きな違いです。

超高層ビルを生んだ技術について触れておきます。2点説明します。一つは、19世紀半ば以降に、速く、安全な乗用エレベーターが開発・普及していったことです。エレベーター開発以前、建物の高さの限界は、階段で登れる高さで決まっていた。エリシャ・グレーブス・オーティスが、1853年のニューヨーク万博で安全装置付きのエレベーターの実演を行い、彼はその後、自分でエレベーター会社を設立し、乗用エレベーターを世界に普及させました。

一つ目が鉄骨造の開発です。鉄道や橋に使われていた鉄骨を垂直に組み立ててビルに応用されるようになったのは19世紀末でした。鉄骨造で建ると建物自身の重さが軽くなり、かつ高く出来たわけです。エレベーターと鉄骨造の技術が組

み合わされて超高層ビルの建設が可能になりました。以上が大まかな超高層ビル誕生の背景です。

続いて、日本における超高層ビルの誕生についてお話しします。その前に、なぜ日本にエンパイア・ステート・ビルのような超高層ビルが建てられなかった理由を説明しますと、端的には次の2点が挙げられます。一つは、1920年から建物の高さが1000尺(31m)に制限されていたことです。もう一つの理由は、日本は地震、台風などの災害国であり、地震や強風による揺れに耐えられる建物をつくる技術が未熟だったことです。

日本が高度成長期に入ると、1000尺制限の弊害が議論されるようになります。その理由の一つが、高さが抑えられた状態で床面積をたくさん取ろうとした結果、建物が横に広がり、建物周りのオープンスペースが狭くなってしまったことです。さらに、床面積を増やすために、地上7、8階程度だったものを9階建てにしたことで、階高が低くなり、室内の環境は悪化しました。また、地下に階数を増やすことも行われませんでした。床面積が増えればそこに出入りする人も増えるので交通渋滞も深刻化しました。こういった問題が高度成長期に入ると議論されるようになり、超高層ビルの研究が本格化していったのです。

1958年に、当時の十河信二国鉄総裁が東京駅丸の内駅舎の超高層ビル計画を発表しました。24階建て、約1000mのビルに建て替える計画でしたが、当時建設技術が不十分だったため、建築構造学者の武藤清氏を中心とする委員会が立ち上がり、1962年に報告書がまとめられました。それによれば、柔構造理論、簡単に言うと建物をがっちりして、揺れを抑えるのではなく、超高層ビルの場合、逆に揺らしながら地震の力を吸収した方が合理的であるとの結論が示され、それによって超高層ビルの建設が可能となりました。

東京駅丸の内駅舎の建て替えは頓挫しましたが、こ

の柔構造理論に基づく技術が霞が関ビル建設に活かされることになり、武藤清氏は霞が関ビルのプロジェクトで構面から中心的な役割を果たすことになりました。1962年には、河野一郎建設大臣が高さ制限の見直しを指示し、翌年には建築基準法が改正され、東京の一部で撤廃が決まりました。その結果、1968年に霞が関ビルが誕生したわけです。丁度この年、日本は西ドイツを抜いてGNPが世界第二位になりました。霞が関ビルは高度成長期の日本のシンボルでもあったのです。これをきっかけに、日本は超高層ビルの時代に突入していきます。

霞が関ビルの計画は、これまでにない巨大なプロジェクトでした。そのため、霞が関ビル建設委員会が設置され、建築設計、設備設計、経営管理、構造設計などの観点から経済的・技術的な実現可能性が検討されました。この建設委員会のなかで、とりわけ中心的な役割を果たしたのが郭茂林先生です。委員会のメンバーは、一言持っている人が多く集まっていたので、うまく調整する必要がありました。郭茂林先生の幅広い知識や多くの人に慕われる人柄がプロジェクトを円滑に進めたと言われています。つまり、郭先生は、霞が関ビルプロジェクトのコーディネーターでありプロデューサーでもあったわけです。郭茂林先生なくして霞が関ビルは完成しなかったと当時から言われていました。近年になりさらにその評価が高まっており、霞が関ビルを語るうえで欠かせないポイントの一つとなっています。

郭茂林先生はその後、台湾でも超高層ビル開発に関わり、台北101(完成時、世界一の高さ)が建設された新都心開発のマスタープランの作成にも関与しました。マスタープラン作成は、当時の台北市長李登輝氏からの依頼を受けたものでした。台湾と日本の超高層ビルをつなぐ役割も、郭茂林先生を抜きには考えられなかったわけです。また、西新宿の超高層ビル街の

マスタープランにも郭茂林先生が大きく関わっていました。

以上を踏まえて、超高層ビルの歴史的意義について考えてみたいと思います。

一つは、やはり、土地の高度利用・効率的な利用を実現したことだと思います。これは高層化、つまり空を拓くことで可能となったわけです。アメリカでは19世紀に西部開拓が進みましたが1890年の国勢調査でフロントニアの消滅が宣言されます。同年には、ニューヨークのマンハッタンに高さ90mのニューヨーク・ワールドビルが完成し、宗教的シンボルでありマンハッタンで一番高かったトリニティ教会の高さを初めて抜き、本格的に摩天楼によって空を拓かれていくことになりました。アメリカが、平面的な開拓から垂直的な開拓へと転換した象徴的な年が1890年だったわけです。日本にとつての転換点となる年は、やはり霞が関ビルが完成した1968年と言えるでしょう。超高層ビルによる垂直都市の実現が、土地の高度利用を可能としたのです。

その後、超高層ビルの普及が進み、近年は超高層住宅の建設が活発です。都心の地価が高い場所です住宅を供給するには、超高層化は効果的な手法です。2000年以降に東京都内で建設されたタワーマンションは60m以上の高層ビルの60%を占めるようになりました。タワーマンションは、居住の都心回帰の受け皿となったのです。とはいえ、タワーマンションは様々な問題もはらんでいます。景観や日照を阻害したり、圧迫感やビル風をもたらしたりすることなどが指摘されています。また、超高層マンションが増えた結果、小学校不足が起り、また通勤時の駅の混雑も起きています。これは、本来、インフラとのバランスを考えずにタワーマンションの建設を認めた都市計画の問題でもあります。丸の内や日本橋の超高層ビル開発では、高さ31m(昔の

100尺)を超える部分を道路から離してつくることで、ヒューマンスケールな街並みを実現し、ビル風や圧迫感の軽減を図っています。

二つの目の意義ですが、建物を上に伸ばすことにより都市に不足していた広場(オープンスペース)が創出され、都市に潤いをもたらしたことです。過去40年間に、総合設計制度という規制緩和制度を用いた超高層ビル開発によって、東京には200ヘクタールのオープンスペースがつくられました。これは日比谷公園12個分に相当します。東京23区の一人当たりの公園面積は、欧米諸国の大都市に比べて少ないことが指摘されていますが、超高層ビルが生み出すオープンスペースによって、公園不足を補うという考え方が超高層ビルの黎明期にはありました。

ただ、せっかく広場がつくられても、人に使われないう閑散とした広場も少なくありませんでした。それを受けて、近年は魅力的な広場をつくらうとする試みもなされています。例えば、屋上庭園(東京ミッドタウン日比谷、銀座シックス)、中庭(丸の内パークビル、三菱一号館美術館)などが整備され、多くの人でにぎわっています。

御茶ノ水駅前の新御茶ノ水ビルディングは、40年ほど前につくられた郭茂林先生らの設計による超高層ビルですが、低層棟には、掘り込んだ広場であるサンクンガーデンが設けられるなど、豊かな公共空間となっており、いつ訪れても多くの人が歩いています。また、近年は、広場以外の地域貢献機能を設ける超高層ビルも増えつつあります。例えば、文化施設の整備や歴史的建造物の保存、防災関連施設などの整備が進んでいます。

最後のまとめとして、これからの超高層ビルをどのように考える必要があるのかについてお話をします。現在の超高層ビルを見ると、短期的な経済性という目先の利益だけを求めてつくり過ぎていくように思

います。つくること自体が目的になっており、超高層ビルによって、どのような都市をつくりたいのかといった理念が欠けているように感じます。ここで、霞が関ビル建設委員会の委員長だった氷室捷爾・三井不動産副社長の言葉を引用します。「霞が関ビルの建設は、より価値多き広場をつくるための決断であった。かくして、超高層ビルは、いわば目的ではなく、手段であった」。黎明期の超高層ビルには、明確な理念があったことに、我々は改めて思いを致す必要があるのではないのでしょうか。

今後、日本で超高層ビルをたくさんつくる必要があるのかといった問題もあります。なぜなら、2065年には人口が8800万人になると予想され、現在より約4000万人減ります。ビルが大量に余ってこるなかで、超高層ビルが適切に維持管理されていくのが非常に疑問です。これから超高層ビルの老朽化問題が急速に進むはずで、東京では60メートル超のビルで30年経過した建物が156棟あり、さらに20年後には820棟に増えます。これは霞が関ビル330棟分の面積に及びます。超高層ビルが負の遺産になるかもしれないのです。

最後にお伝えしたいのは、郭茂林先生をはじめとする超高層ビルの黎明期に関わった人々には、超高層ビルをつくる理念や哲学が明確に存在していたことです。超高層ビルを手段として、どのような都市を建設したいのか、人口減少時代に対応してどのような都市を実現すべきなのか、これらの問いに我々は真摯に向き合うことが求められているのではないのでしょうか。

以上で、私の講演を終わります。

なお講演終了後、大澤昭彦先生の著書「高層建築物の世界史」(講談社現代新書・2015年発行)が練馬区立図書館で閲覧可能であることが報告されました。

春の予告

「空を拓く」上映会

協会が製作した郭茂林の生涯を描いた「空を拓く」建築家・郭茂林という男」を次の日程で上映します。

入場 無料
会場 練馬ココネリ西ホール
日時 平成31年2月21日(木) 午後1時15分
終了2時40分

クラシックコンサート

入場 無料
会場 練馬ココネリ西ホール
日時 平成30年2月21日(木) 午後2時50分
終了3時40分
演奏 ピアノとフルートによる演奏
曲目 追って発表
ピアノ 難波益美さん フルード 伊東優梨さん

新年交流会

コンサート終了後、新年会を開きます。会場はホールの隣室です。映画・コンサートについての感想などを伺うとともに参加者の相互紹介を行い、日台親善交流を深めます。

会場 練馬ココネリホール東ホール
時刻 午後3時45分開会
会費 3000円(出前の料理と飲み物とも)
終了は午後5時30分の予定です。

申し込み 協会に2月19日まで電話・FAXで
申し込みを 03-3999610177

超高層ビルの誕生とその歴史的意義

- ・ 霞が関ビル完成から 50 年。霞が関ビルを超える高層ビルは国内に約 240 棟（150m 以上）。超高層ビルのある風景は日常になった。
- ・ 超高層ビルが生まれた背景を理解したうえで、超高層ビルの歴史的な意義、さらには人口減少社会を迎えた日本で超高層ビルの課題を考えたい。

1. 世界の超高層ビルの状況：アメリカからアジア・中東へ

- ・ 高さ 150m 以上は約 4,242 棟（2017 年末）。うち 75.8% が 2000 年以降に建設。
- ・ アジア全体で 2,678 棟（全体の 62%）。アジアのうち中国が 63%。

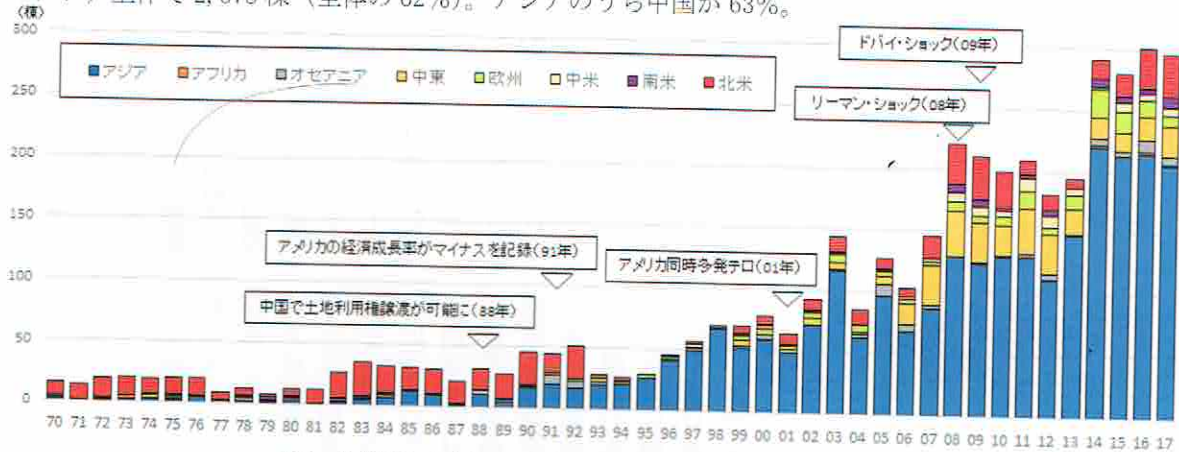


図 1 地域別にみた超高層ビルの建設数の推移（高さ 150m 以上）
 (Council on Tall Buildings and Urban Habitats のデータベースを基に作成。)

2. 超高層ビルの誕生：19 世紀末～20 世紀初頭の摩天楼

<摩天楼誕生の背景>

- ① 産業革命以降、高層ビルをつくる技術が進歩
- ② 資本主義経済の確立が高層ビルの需要と建設資金を生み出す

<摩天楼誕生の技術的な必要条件>

- ① 乗用エレベーターの開発
- ② 鉄骨造の開発

3. 日本における超高層ビルの誕生

<日本の超高層ビルが遅れた理由>

- ① 100 尺（31m）の高さ制限（1920 年）
- ② 地震や台風等の災害国

<100 尺（31m）制限の弊害>

- ① 建蔽率増加（建物が横に広がる）
- ② 床面積の増加（階数・地下階の増加）

<超高層化の研究>

- ・ 1958 年、十河信二国鉄総裁が東京駅丸の内駅舎の超高層化（24 階建て）を発表。
- ・ 1959 年に国鉄が「建築物の適正設計震度の研究委員会」（武藤清委員長）設置。
⇒「柔構造理論」（揺らすことで地震の力を吸収）確立。

<絶対高さ制限の撤廃>

- ・ 1962 年、河野一郎建設大臣が絶対高さ制限見直しを明言。
- ・ 1963 年、建築基準法改正。絶対高さ制限を撤廃。

<超高層ビルの時代：霞が関ビル誕生>

- ・ 100m を超える本格的な超高層
 - ・ オープンスペースが 72%
 - ・ H 型鋼の開発 など
- ⇒ 超高層ビル時代へ。霞が関ビルは高度成長期の象徴に



図 2 丸の内ビルディング（高さ 31m、1923 年）



図 3 東京駅丸の内駅舎超高層化イメージ図

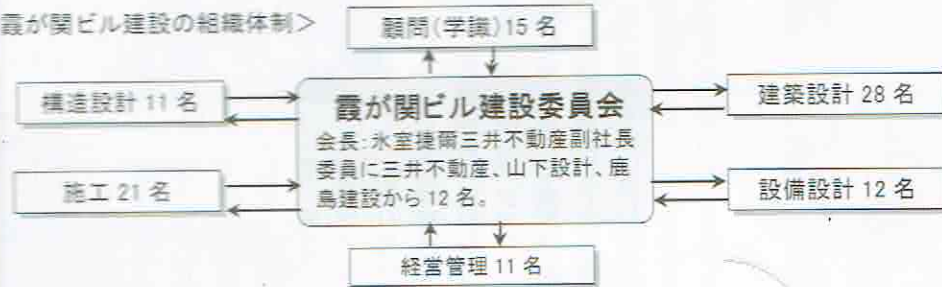


図 4 霞が関ビル（高さ 147m、1968 年）

2018 年 10 月 7 日

大澤昭彦 高崎経済大学地域政策学部 aosawa@tcue.ac.jp

<霞が関ビル建設の組織体制>



建築家・郭茂林が建設委員会委員としてデベロッパー、建設会社、設計事務所等をつなぐコーディネーターに。

4. 超高層ビルの展開

東京の 60m 超の高層ビルは約 1250 棟 (2000 年以降 64%)。バブル期よりも多い。背景には都市再生による規制緩和、100m 超は約 430 棟 (2000 年以降 72%)。

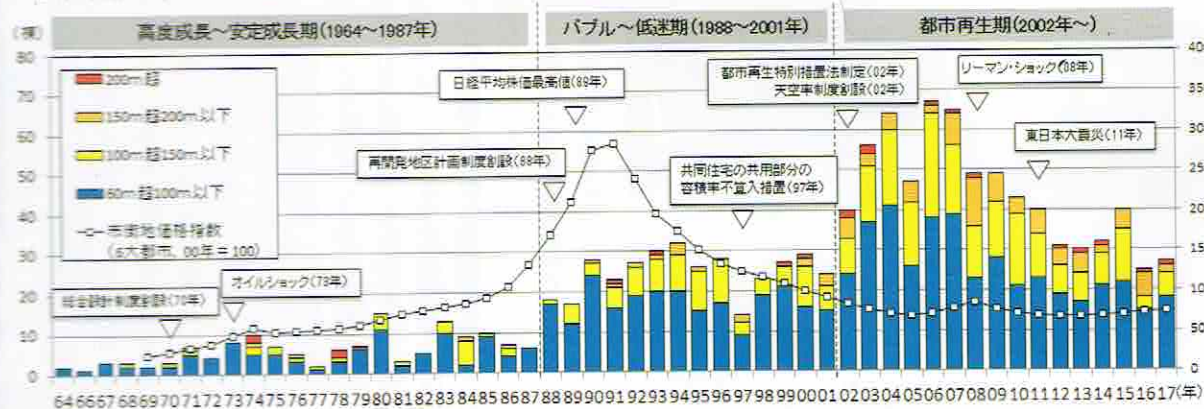


図 5 東京の超高層ビルの建設数の推移 (高さ 60m 超) (東京都建築統計年報 2015 年版を基に作成)

5. 超高層ビルの歴史的意義 (以下はあくまでも一例)

超高層ビルの意義	課題・問題点 ⇒ その対応策
(1) 平面都市から垂直都市へ 平面的に低・中層の建物が広がる都市から、垂直的に利用できる都市へ。 地価の高い大都市部の土地の高度利用。 業務機能の集中のみならず、近年は居住も(タワーマンションによる都心居住)。	・ 圧迫感、ビル風、日照・景観阻害など。 ・ タワーマンションを巡る問題(小学校不足、駅の混雑等) ※都市計画の問題? ⇒ 足元周りをヒューマンスケールにする試みも(丸の内、日本橋など)
(2) 都市に広場を創出 超高層ビルは都市に不足していた広場(オープンスペース)・緑を創出。 容積緩和の要件としてのオープンスペース設置。 東京で 40 年間に日比谷公園 12 個分の広場。	・ 使われない広場・使いにくい広場を生む ⇒ 近年の開発では広場が多様化・魅力的な空間に。 ◇ 屋上庭園(ミッドタウン日比谷、KITTE 等) ◇ アトリウム(丸ビル等) ◇ 中庭(三菱一号館美術館) ⇒ 広場の創出だけでなく、文化施設、歴史的建造物の保存、防災関連施設設置による地域貢献。
(3) 新たな都市のシンボル 超高層ビルが都市のランドマーク、シンボルに。 霞が関ビル、サンシャイン 60、都庁舎など。	・ 周囲の高層化で、視覚的なシンボル性に影響。 ⇒ 港区は、東京タワーへの眺望保全を実施。超高層ビルでは例はないが、いずれ行われる?

6. これからの超高層ビル

現在、短期的な経済性の追求に捉われ過ぎていないか? 超高層ビルをつくることが目的になってないか?

「(霞が関ビルの建設は) より価値多き広場をつくる目的のための決断であった。かくて“超高層ビル”は、いわば目的ではなく、手段であった」(氷室捷爾・霞が関ビル建設委員会会長)

長期的な視点を踏まえてつくられているのか? 人口減少が進む我が国において、林立する高層ビルが負の遺産になる恐れはないか。急速に増加した超高層ビルは、今後急速に老朽化。
郭茂林をはじめとする日本に超高層ビルをもたらした人びとには、理念や哲学があった。これからの都市は、超高層ビルの建設を通じてどのような都市を実現したいのか?

<参考文献> 大澤昭彦 (2015) 「高層建築物の世界史」 講談社現代新書

台湾夜市は大勢の参加者でにぎわいました。



会場風景

会報、チラシをはじめ台湾観光協会から贈られた台湾観光資料と、日台友好交流に努めている協会の活動のパンフレットを手渡し紹介しました。また本会の活動に協力する事業者に会場を提供して出張店を開いてもらい、展示即売を行いました。台湾料理、点心、台湾野菜、茶、アクセサリー、チーパオの体験など活気のある会場になりました。



夜市で交流の参加者

記念植樹のしだれ桜を補植しました

本協会が橋渡しをして実現したお茶の水女子大学附属高校と台北市立第一女子高級中学の学校交流を記念する桜が東京都文京区の附属高校校庭にあります。この記念樹1本の補植と手入れを行い学校交流記念植樹の看板を設置しました。当日は江明清氏（前台湾観光協会東京事務所所長）、協会田代理事長、加藤理事の三名が参加した。尚、記念看板は高村英之会員が玄人だしの腕前で製作したものを打ち込みました。

来春は今年以上に多く開花し鑑賞者に喜んでもらえることを期待したい。



記念樹の手入れと標識



「西川満と会津若松、台湾」展に参加しました。

「西川満と会津若松、台湾」展が福島県会津若松市の福島県立博物館で（7月2日～8月18日まで）、7月12日開会式が行われ協会田代理事長、加藤理事が式典に出席し祝意を表した。

開幕式の赤坂館長の挨拶、小林学会員の説明、長男西川潤氏（11月スペインで客死の挨拶など）内容が充実した開会式であった。

●編集後記●

オール台湾デーが三回目を迎えた。協会の会員、協会活動を理解し協力してくださる住民の方々の力を結集して開催された。年々、世人に知られるようになってこの行事を楽しみにしていただいている方がおられることは協会にとって大いに励みになることである。心から感謝の気持ちで開催に当たった。

○今回のオール台湾デーの紹介、講演録音の文字起こしは 児玉 治会員（茨城大学・華中師範大学名誉教授）の手によるものである。たいへんなお骨折りに深く感謝します。

○またオール台湾デーのポスター、チラシのデザインは 湧生が母の 戸田貴之氏の手によるもので、氏のボランティア奉仕に感謝しています。このチラシは 2000 枚を作製し配布した。

○大澤昭彦先生著書に「高さ制限とまちづくり」、高層建築物の世界史」があります。

○会員と賛助員等協会の活動に力を尽くす方々が30名になりました。お互いの長所を生かしながら目的に向かって頑張りましょう。

協会ホームページの案内

ホームページ <http://biaj.jp>

本協会の構成員（会員及び賛助員等）

平成30年12月15日現在

理事長	田代 實範	児玉 治
理事	加藤美智子	島中 治憲
理事	中村 和利	上里 佑子
監事	岡村 悦子	堀 泰博
監事	川添ミチ子	尹 世玲
映画製作委員	郭 純	金子 容子
	鳥羽 展維	尹 秀世
	林 銀	松本里代子
	江波戸つぎ	高村 英之
	松山 達郎	荻原 明
	新城 肇	丸田 英明
	豊川 玉蘭	成島 一之
	銭 妙玲	三原 千佳
	張本 晃次	藍 健吉
	仲里 健良	張本 慶火

特定非営利活動法人

ベシックライフインフォメーション協会

会報第16号

発行日 平成三十年十二月二十日

発行所 東京都練馬区石神井町

六二二一三

電話 〇三―三九六―〇一七七

発行人 田代 實範